

## 看護教育における初期体験実習の経験と意義

Experience of the Early Exposure Practice in Oita University of Nursing and Health Sciences

桜井 礼子 Reiko Sakurai, RN

大分県立看護科学大学 広域看護学講座 保健管理学 Oita University of Nursing and Health Sciences

山口 真由美 Mayumi Yamaguchi, RN

大分県立看護科学大学 基礎看護科学講座 基礎看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

1999年7月20日投稿, 1999年11月24日受理

### 要旨

看護教育の大学化が進む中で、各大学がより効果的な教育手法等の取り組みを行っている。今回は、本学で行った初期体験実習（第一段階の実習）の概要と実習の成果を報告する。初期体験実習は、1年次の早い時期(9月)に学生が看護の様々な活動を見たり体験することを通して、看護の役割と看護職の多様性を知り、看護に魅力を感じることによって、学習に意欲的に取り組むことを目的に実施された。実習方法は、保健・医療・福祉の場から14施設を選び、全5日間で2～4日目の3日間を施設実習とした。その結果、学生は看護職の多様性、看護の基本となるもの、看護職の魅力などを学びとることができ、さらに学生自身がそれぞれ今後の学習課題を認識することができ、効果的な実習であった。今回の経験を通して、学生が早い時期に様々な領域で実習を行うことは効果的であり、良い実習環境をつくるには、実習施設の選定と、担当教員の役割や実習施設の指導者との連携が重要であることが再認識できた。

### Abstract

As nursing education is advancing at the university level, many institutions are engaged in the development of more effective educational techniques. This paper presents an experience of the Early Exposure practice trial conducted by this university. Early Exposure practice was conducted in September at the end of first semester in the freshman year of study. It was hoped that through experiencing variety of facilities and nursing activities, such early exposure would serve to make students aware of the role of nursing and the diversity of the fields of nursing, to make them feel the appeal of nursing, and to motivate them to apply themselves very actively to their four years of study. Early Exposure practice was conducted over a period of five days. The facilities chosen included a general hospital, public health welfare, and industrial health facilities. Actual practice occurred at 14 facilities for a period of three days. Remaining two days were for orientation and final group presentation. Early Exposure practice was considered a success, as students were able to personally experience the basic of nursing and the various aspects of the profession of nursing, to feel the appeal of the profession of nursing, and also to come to an understanding of their future areas of study. This experience renewed our appreciation of the effectiveness of students practicing in a variety of places at an early stage, and of the importance of both the selection of the practice facility, and the genuine cooperative relations faculty and the practice facility staff in creating a good practice environment.

### キーワード

看護教育, 看護実習, 初期体験実習

### Keywords

Nursing education, Nursing practice, Early Exposure practice

### 1. はじめに

近年、少子・高齢化社会を迎え、家庭、職場、地域等の幅広い領域において、人々の多様な健康ニーズに貢献することができる看護者を養成することが求められ、大学での看護教育に対する期待が高まっており、平成元年には11校であった看護大学は、平成11年には、76校に急増している。

看護教育の大学化が進む中で、看護教育のカリキュラムは、各大学が指定規則を念頭におきながら、それぞれの経験をもとに、独自の教育プログラムを作成している。そして、実施した教育内容をフィードバックしながら、より効果的な教育を行おうと努力している。しかしながら、大学教育としての看護教育の

あり方については、今後さらに数多くの検討を重ねてシステムとして整えていく必要がある。このためには、お互いの経験等を情報交換しながら、大学における看護教育を体系化していく必要があると考える。

そこで、今回は、本学で行った初期体験実習( Early Exposure )の概要を紹介し、実習の成果、今後の課題などを報告する。

## 2. 初期体験実習の概要

### (1) 基本的な考え方

本学での看護実習は、学習レベルに応じて表1に示すように5段階で行っていくこととし、初期体験実習( Early Exposure )はその第1段階に位置づけられている。この初期体験実習では、これを1年次前期という早い時期に行うことにより、看護の楽しさを実感し、学習することの意味づけを自ら認識し、理解することによって、意欲的に4年間を学習できることを目指している。

この実習の目的は、保健・医療・福祉の場における様々な看護の活動を見たり、体験することにより、看護に魅力を感じたり、興味を持ったりし、今後の学習の動機づけをすることである。さらに、実社会で生活している人々の健康状態、健康ニーズには、様々なレベルがあることを理解し、看護実践の場が社会に広く

存在することを知り、それぞれの領域における看護の役割を理解することも目的とした。そして、これらの目的を達成するために以下のような目標を設定した。

実習施設の設置目的はどのようなものかを知る。

実習施設で働く看護職の役割について知る。

看護職について仕事の実際を見たり体験する。

看護の対象にふれる。

各施設でそれぞれ実習し体験したことをグループ内またはクラス全体で共有する。

自己の今後の学習課題を知る。

### (2) 実習の方法

#### i) 実習施設

第一段階の目標を達成するために、表2に示した幅広い領域の施設に実習をお願いした。

#### ii) 実習日程及び実習内容

実習時期は1年次9月とした。これは学生が大学生活に慣れ、入学時から始まっている看護学概論で看護の入口が見えてくる頃と考え、実習時期として選択した。実習期間はオリエンテーション及びカンファレンスを含めて5日間である。基本的な実習内容は表3に示す通りである。学生には、この実習の前(看護学概論の講義の終了直前)に動機付けとして、『看護とは』というテーマで簡単なレポートをまとめさせ、これを

表1 5段階実習の流れ

段階	領域	実習時期	実習目的
第1段階	初期体験実習 ( Early Exposure )	1年次 前期後半(9月)	看護の場の広がりや看護者の役割、人々の多様な健康ニーズを把握し、看護の魅力を実感する
第2段階	基礎看護学実習	2年次 後期・後半 (1月)	入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態を踏まえ、日常生活の援助の方法を学ぶ
第3段階	看護アセスメント学 実習	2年次 後期・後半 (2月)	患者の身体面、心理面、社会面を総合的にとらえ、健康問題を明らかにするプロセスを学ぶ
第4段階	専門看護学実習 成人看護・老人看護 小児看護・母性看護 精神看護・地域看護	3年次 後期・前半 (10~12月) 4年次 前期・前半 (5月~6月)	各領域別の看護の特性や看護過程を踏まえて個々の対象に応じた実践の方法を学ぶ
第5段階	総合実習	4年次 前期・後半 (6月)	第1段階~第4段階までの看護実習の体験から自らが希望する領域を選択し、その分野での看護実践を通して、専門職としての自覚を高める

表2 実習施設

	実習施設	従業員数または利用者数	看護職数	学生数	教員数
事業所	A	従業員 2,303 人	3	4	1
	B	従業員 1,199 人	5	4	1
	C	従業員 753 人	2	4	1
	D	従業員 2,300 人	9	4	1
	E	従業員 3,776 人	4	4	1
検診センター	F	利用者数 54,165 人/年	10	6	1
	G	利用者数 53,767 人/年	29	6	1
病院	H	ベッド数 630 床の総合病院	359	6	1
	I	ベッド数 97 床のリハビリテーションセンター	35	6	1
老人保健施設	J	入所定員 100 人 通所定員 50 人	12	6	1
	K	入所定員 90 人 通所定員 35 人	16	6	1
	L	入所定員 100 人 通所定員 40 人	13	8	1
	M	入所定員 100 人 通所定員 40 人	10	6	1
	N	入所定員 100 人	4	8	1

表3 実習の内容

	内容
1 日目	<b>学内オリエンテーション</b> ・全体のオリエンテーション；実習の目的・目標、スケジュール・記録・評価、注意事項など ・施設別オリエンテーション；実習施設の場所や職員の数等簡単な概要説明、具体的スケジュールなど
2 日目	<b>施設実習</b> ・学生自身が行動目標を考え、可能な限り実際の現場を体験し、看護の対象と直接話す機会を持つ；施設の概要説明を受ける、看護職者から仕事内容や看護する喜び等について話を聞く、実際のケア(保健指導・健康診断・診療の介助・生活援助等)の見学、対象者と直接関わる(対象者と話をする・アンケートをとらせてもらう・衣服着脱や移動の介助・入浴介助・食事介助・おむつ交換など)
3 日目	
4 日目	
5 日目	<b>学内カンファレンス</b> ・グループワーク；実習で体験したことを各グループでグループ・レポートとしてまとめ、全体発表の準備をする ・全体発表；各グループごとに OHP を利用して発表を行い、施設ごとにディスカッションを行う

学生の情報として実習施設の指導者に事前に提示した。

実習の成果は、日々のカンファレンスと毎日提出させるデイリー・レポートの中で確認した。また実習最終日には、学内カンファレンスや全体発表を含めた実習全体に対する感想や学習課題についてまとめたも

のを、ファイナル・レポートとして提出させ、個々の学生の評価に用いた。

iii) 施設実習の指導体制

1 施設に対し学生4名～8名と担当教員1名を配置し実習を行った。

各施設での具体的な実習内容は、事前に担当教員

と施設の指導者が話し合いを持ち、実習の目的と学生の学習状況を指導者に理解してもらった上で、それぞれの施設に合わせ調整した。実習中の指導の主体は施設の指導者で、担当教員は、学生が体験し得た情報を整理し自分たちの学びにつなげていく過程や、グループワークによって学生が自分の考えを発言し学びを共有するという過程に関わっていった。その上で、教員と施設の指導者とで、学生の日々の学びについて情報交換し実習内容の調整も行っていった。

日々のカンファレンスにおいては、学生が主体的に自由にディスカッションできるよう心がけた。また、カンファレンスには、施設の指導者にも参加を求め、適宜指導・助言をいただいた。さらに担当教員は、学生が毎日提出するデイリー・レポートについては、その日のうちに目を通してコメントを返し、学生の実習での学びを確認していった。

### 3. 実習の成果

#### (1) 分析方法

実習の成果は、施設ごとにまとめたグループ・レポートと78名分のファイナル・レポートを対象に判断した。グループ・レポートは、施設ごとに、各施設の概要、施設の対象者の属性、特徴と健康ニーズ、看護職の役割、個々の感想・印象について共通点と相違点を要約したものである。また、ファイナル・レポートは、実習の最後に学生が個々の学びをまとめたものであり、施設実習で学んだこと、グループでのまとめや全体発表会での情報を得て実習全体で学んだことや、今後の学習課題がまとめられたものである。これらのレポートに記述された内容で、学生が学んだこと、体験して感じたことを、前述(2 1))した6つの目標にそって実習施設ごとにまとめた。さらに、実習施設を事業所、病院、健診センター、老健施設の4グループにまとめ、学生が目標にそってどのような学びができていくかについて分析を行った。

#### (2) 分析結果及び考察

実習施設の設置目的はどのようなものかを知る

この目標は、その施設がどのような人を対象としているか、その対象となる人々の健康ニーズを知り、その施設の設備、環境がどのようなになっているかを知ることである。学生はどの施設でも、施設の看護職や職員から施設の説明を受け、また対象者と看護職が接する場面をみることから、施設がどのような人々を対象としているかを理解している。例えば、老人保健施設

では、老人保健施設と老人ホームの違いを知ったり、事業所や検診センターでは、対象者は健康な人であり、病院とは対象が違うことを学んだりしている。また、対象者にあわせて例えば老人保健施設では、安全を配慮した手すりを付けたり段差をなくす等のような設備の工夫をしていたり、事業所では、分煙や作業環境に合わせた照度の調節等といった環境への配慮がされていることを実際に見て学んでいる。

実習施設で働く看護職の役割を知る

この目標は、実習施設の組織を知り、看護職の位置づけやどのような看護が対象者に提供されているか、またどのような専門職が働いていて、看護職とどのような連携をとっているかについて知ることである。学生は、看護職の役割について、看護職から直接説明を聞いたり、実際の活動を見ることで、その特徴を理解している。たとえば、事業所では、対象が健康な人が中心であり健康の維持や予防といった活動を行っていること、老人保健施設では、対象者が高齢であり日常生活のケアと生活の自立にむけた援助が行われていることを学んでいる。また、事業所や健診センターでは、同じ施設で働く保健婦と看護婦という異なる看護職を比較してその役割の違いを知り、病院では看護婦でも所属する部署により役割が違うことを学んでいる。また、それぞれの専門職から直接話を聞いたり実際の活動を見ることで、その役割を理解し、さらに看護職と専門職がチームとして連携をとって仕事をしていることを学んでいる。

看護職について実際に仕事を見たり体験する

看護の対象に触れる

この2つの目標は、学生が看護職および看護の対象に触れるという体験を通し、学生自身の看護に対する気づきや主体的に学んでいく過程を大切にしたいと考え設定したものである。

これらの目標の成果を判断するための評価項目を、ファイナル・レポートから文節で抽出して、キーワードにより分類した結果、表4に示すように実習施設全体に共通する内容としてまとめられた。

たとえば、対象者に対する姿勢や人間関係については、コミュニケーションの重要性と難しさ、信頼関係を築くことの大切さ、優しさを持つこと、対象を尊重すること等である。看護職に必要な知識や技術については、幅広い専門知識や熟練した技術の重要性と、何よりも実践が大事であることを感じ取っている。また、学生は看護職が働く場面から、忙しさやたいへん

表4 看護職について仕事を見たり体験して学んだこと

	学生が感じたこと、学んだこと
対象者に対する姿勢・人間関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々のコミュニケーションが大切であること</li> <li>・常にコミュニケーションをとり、笑顔を絶やさず、明るい雰囲気を作っていること</li> <li>・対象者や家族と信頼関係を築くことが大切である。</li> <li>・コミュニケーションをとることで信頼関係を築くことができること</li> <li>・非言語的コミュニケーションの大切であること</li> <li>・対象者の個々の価値観を大切にし、対象者を尊重すること</li> <li>・優しさと厳しさをうまく調和させていくことが大切であること</li> <li>・対象者の身になって考えること</li> <li>・対象一人一人への細やかな心遣いをしていること</li> <li>・知識、技術だけでなく心が大切であること</li> </ul>
看護職に必要な知識・技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門職として幅広い知識が必要であること</li> <li>・知識と技術の両方を備えて、看護実践が可能となること</li> <li>・身体的なケアばかりでなく、精神的ケアが重要であること</li> <li>・看護実践の重要性がわかった</li> <li>・実践することの難しさを感じた</li> <li>・患者を不安にさせないケアが大切であること</li> <li>・観察力と状況に応じた判断が必要であること</li> <li>・対象者の安全、安寧が大切であること</li> </ul>
仕事に対する姿勢、やりがい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前向きで、向上心を持ち続けていること</li> <li>・プロ意識をもち、自分の仕事に誇りを持っていること</li> <li>・ハードな仕事で、看護職のたいへんさがわかった</li> <li>・生き生きと働いていること</li> <li>・体力が必要であり、健康維持の必要性を感じた</li> <li>・看護職は勉強を続けなければならない</li> <li>・大変な仕事だと思うが、そこに魅力を感じることができた</li> <li>・対象者が満足している姿をみることがやりがいにつながる</li> </ul>
対象者と接して印象に残ったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者とコミュニケーションをとるのに苦勞し、とまどった</li> <li>・「ありがとう」のことは、会話ができたときなど、人と触れ合う喜びや楽しさを実感した</li> <li>・対象者の健康に対する関心の高さを知った</li> <li>・対象者と少しだけコミュニケーションがとれ、看護の魅力を少し感じた</li> <li>・何もできない時だからこそ、笑顔の大切さを感じた</li> <li>・ケアに参加して、たいへんさ、もどかしさ、難しさを感じた</li> <li>・何もわかっていないことを実感させられ、少しショックをうけた</li> </ul>

さを感じる一方、どの施設でも看護職がプロ意識や向上心を持ち、生き生きと働いていることを感じ取っている。

そして、看護職から、たいへんさの中にもやりがいや仕事への誇りをもって働いているとの言葉を聞き、学生自身が看護に魅力を感じるように変化している。特に、老人保健施設では、対象者に食事介助や車いすでの移動などの直接ケアを体験できる場が設けられており、実際にケアした結果、対象者の健康ニーズをとらえたり、対象者から笑顔や感謝の言葉をかけられたことで、学生自身が看護の喜びを実感している。

実習前までは「看護職になりたくない」と思っていた学生が、実習終了後には「看護婦になりたい」と気

持ちが変化し、「実習はたいへんだったが楽しかった」、「次の実習へも行ってみよう」と、前向きな反応も得られている。これは、実習施設の指導者が看護職としてのモデルとなったことや、看護職の一言が学生に多くの示唆を与えたことが学生の学びに繋がっており、この時期に看護職と直接接することの影響は大きいと考える。

各施設でそれぞれ実習し体験したことをグループ内またはクラス全体で共有する

ここでは、自分が体験し学んだことをカンファレンスの場で他者に伝えること、他者が経験したことを自分の体験として取り入れることができることを目標とした。

レポートの中で、「他者に自分たちの経験や学びを伝えることの難しさを感じた」「実習で体験したことをみんなに伝えたいと思った」という感想があげられていた。学生は発表会で他のグループの発表を聞くことで、自分の実習した施設と比較し看護職の役割や対象者の健康ニーズの違いに気づき、看護職の活動の場が広く、さまざまな看護が行われていることを学んでいる。また、例えばコミュニケーションの重要性や看護職への魅力など、どの施設の学生も同じような体験や学びをしてきたことに気づき、看護の基本となることは共通していることも学んでいる。

このように学内カンファレンスで学生が学びを共有できたことは、学生自身が自分たちの体験や学んだことを大切に思い、正確に他者に伝えたいと感じたこと、また、他のグループがどのような体験をしてきたのか知りたいという関心を持ち、積極的に聴く姿勢をもったことが要因になっているのではないかと考える。

#### 自己の学習課題を知る

この目標は、専門職としてどのような知識、技術や態度が必要であるかを学ぶことである。学生自身が体験し、気づき、実感したことが学習の動機付けに結びついていることが、ファイナル・レポートに示されている。

すべての学生が共通してあげている学習課題は、専門的知識と実践できる技術を身につけることである。また、人間関係の重要性を実感し人間として成長すること、看護職としての資質を身につけるために、特に普段の生活の中からたくさんを経験し学んでいくことの必要性をあげた学生が多かった。レポートでは、実際に働く看護職の姿をみて看護に魅力を感じたことが学習の動機付けとなった要因として多くあげられている。また、学生自身が実習現場で看護職が話す言葉が理解できなかつたり、対象者とうまく話ができなかつたことから、今の自分が何も知らない、何もできないためであることを自覚したことも今後の学習の動機付けの一因となった。

そして、今学んでいる講義が、今後どのように結びついていくか、その必要性を認識できたことで、「自ら積極的に動いて経験し、いろいろなことを吸収したい」「学問上の看護だけでなく看護の実践もしっかり学びたい」「これまで受け身だったが、行動をおこせるように積極的にになりたい」等という記述が見られ、前向きに学習に取り組もうという姿勢が生まれてきていることがわかる。

## 4. 実習内容と指導体制の評価

### (1) 実習内容

実習1日目に、実習に取り組む準備をするために学内でオリエンテーションを行った。特に目的・目標を理解することと、はじめて実習にでるため実習上の心得についても重点をおいた。しかし、オリエンテーションに遅刻してくる学生が数名いた。オリエンテーションが実習の一部であることを意識づけ、実習目的を理解させるとともに、初めての実習に出るときの学生の姿勢に関しての指導を十分にする必要があると感じた。

実習のグループ編成は、施設の受け入れ状況と施設数の関係から1グループ4名～8名とし人数の調整を行った。しかし、1グループ8名であった2施設を担当した教員から1年次の学生であり、施設実習で学生がどのようにしているかを把握するには多い人数である、との意見があった。今後、実習施設を増やすことと共に、グループの人数についても検討が必要である。

施設実習の3日間は、初めての臨地実習ということで、学生の緊張度やストレスを考慮し、初日を金曜日とし土・日曜日の休日を入れ、月・火曜日と続けた。この3日間で、学生は、施設の概要を理解し様々な場面で看護の実際を体験し学ぶことができた。実習施設についてほとんど知識がない状態から実習を始めること、体験実習であることを考えると、施設実習の期間は3日間で適当ではないかと考える。

学内カンファレンスは、グループワーク、全体発表を1日の予定で行った。半日のグループワークでは、3日間の実習で得たたくさんの情報を整理し意味づけをし学びとしてまとめることにより、多くの知識を得、共有することができていた。また、全体発表では、実習の成果を発表する場をもつことにより、お互いの学びを共有し、看護の多様性を理解することができていた。しかし、グループによっては「プレゼンテーションがうまくできず残念だった」「時間が短く、言いたいことを全て発表できなかった」等とグループワークの時間が不足、まとめや発表の準備が十分でなかったという感想があった。グループ・レポートの作成や、各グループの発表からお互いが経験を共有するという目標から見ると、もう少し時間をかけた方がいいと考える。

### (2) 指導体制

施設の特徴を活かした個別の実習計画を立案し、

学生の学びを教員と施設の指導者がお互いに確認しながら実習を行えたことは、学生の大きな学びに繋がった。学生に良い実習環境を提供するためには、実習施設の選択、担当教員と実習施設の指導者の役割の明確化と連携が重要である。

また、実習施設の看護職やスタッフが学生に様々な事を学んで欲しいという熱意をもって接して下さったことを、学生はレポートの中で、実習施設に暖かく迎えられたと述べている。実習施設の指導者からは、『学生からさまざまなことを問いかけられたことで、自分たちの仕事をあらためて振り返るよい機会となった』とのコメントを多く寄せていただいた。このように、実習施設の指導者の実習に対する熱意や取り組み姿勢も、よい実習環境を作り出した要因と考える。

#### 5. 初期体験実習の意義

初期実習をこの時期に行うことは、学生にとっては、看護の知識もほとんどなく、いったいどんなことを実習で学ばよいか戸惑いが大きく不安な状況におかれることになる。しかし、このような学生の状況を理解して、施設の指導者に指導していただいたことや、施設のスタッフや対象者の方々から実習中暖かく見守られたことは、学生には大きな支えとなった。学生は提示された目標を基に、自分たちの目の前で行われる看護場面に緊張しながらも、たくさんの新しい情報や現場での気づきを得ることで、自ら学ぼうという姿勢に変化していった。実習でなければ学べないことは何か、また、看護職や対象者に直接接触れることから、講義では得られない自分たちの体験や観察と感性を通して学ぶことの大切さを実感したと言える。

また、初期体験実習は、学生自身の看護職に対するイメージや認識にも変化をもたらした。これまで多くの学生は、看護職は病院で働く看護婦であるというイメージを持っていたが、看護職の活動領域には様々な領域があることを認識し、自己の進路について広がりを感じるようになった。また看護職に魅力を感じ、専門的知識・技術はもちろんのこと、多くの様々な経験から豊かな人間性を形成することの必要性を認識し、これらが学習意欲へと繋がっている。

今回の実習目的は、看護職の多様性を理解し、看護に魅力を感じ、自己の学習課題をもち積極的にその課題に取り組もうとする姿勢が生まれてきている、という点で達成されたと考える。このように、早い時期に様々な看護職と対象者がいる施設での看護実習方法

は、学生の学びを様々な角度から広げ深めることができる。また、今後の学習のレディネスをつくることにもなり、初期実習として意義があると考えられる。

#### 6. おわりに

本学における初期体験実習の経験を振り返り、看護教育における初期実習のあり方について検討を行った。どのような施設を選択し、学生にどのような体験の場をつくるかは、初期実習では特に重要であることが再認識できた。今後、看護職の活躍の場が広がることを考えると、学校保健や精神保健及び在宅看護の場などを追加することで、さらに学生の学びに広がり期待できるのではないかと考える。この初期体験実習の成果をもとに、さらに次の段階の実習の検討を続けていきたい。

---

#### 著者連絡先

〒 870-1201  
大分県大分郡野津原町廻栖野 2944-9  
大分県立看護科学大学 保健管理学研究室  
桜井 礼子  
sakurai@oita-nhs.ac.jp